

徳次郎石の文化及び富屋地域内の分布

中川 博夫（元宇都宮市立富屋公民館）

1. はじめに（徳次郎石研究の概括）

「徳次郎石」は、旧日光街道西側の徳次郎山中から採石される凝灰岩をいう。

この石組成による特徴は、大谷石に比べて、白く・固く・味噌目が少ないので、希少価値が高い石材とされてきた。石の利用は、宗教的なもの、生活必需品から建築材までに及び、周辺の大谷などの石産地と異なる独自の文化を形成して発展した。

産業としては、江戸時代からの日光街道の繁栄の需要と共にあったが、資源が薄いため、時代の要請に応えられないまま、平成2年、終焉することになる。徳次郎石の採石地が大谷に近接しているにも関わらず、何故異なる石組成が生じ、地元の石工達により、その絢爛たる地域文化が開いたのであろうか。



図1 徳次郎石文化の宇都宮市富屋地域の相關地図

2. 徳次郎石の伝統を引き継いだ、今は亡き最後の石工達の証言から、そのルーツを探る。

(A) 伝法寺起源説（門前石工 手塚宏）〈1349年頃〉

修行僧が20人いたという、伝法寺の創建（貞和5年1349）には、隣接した徳次郎山の石を使用したというのが始まりという。この大きな寺の建設には、多くの石が用いられたことが考えられ、仏僧の石工がもたらしたと考える。

寺の前にある集落、門前・田中・西根は、〈徳次郎郷〉を形成し、ここに徳次郎石がもたらされたとする。（それは徳次郎石・徳次郎刀・石見国からの亀井六郎の伝説の里でもある）



写真1 伝法寺 正保2(1645)年の大火により多くのものが焼失した

(B) 池田対馬守説（西根石工 池田忠臣）

一説によると信州の戦国の武士であり、西根に到来する。以来、「庄屋」として、徳次郎の村落を治める。徳次郎石の始まりは、これによりもたらされたとする。

別途、信州より「高遠石工」との、石仏などでの関連性を述べる説がある。民間の宗教的な徳次郎石の石造物は、この周辺を含めて、村落の里・山中に多く点在しているのが特徴的に見られる。これらは、「滅して土に還る」とする、人々との宗教感に近いものがあるのかも知れない。



写真2 西根庄屋蔵 徳次郎石蔵の気品と風格を伝える 明治9年建築

(C) 元禄遡る100年説 (田中石工 池田武夫)〈1500年後半〉

富屋地域内に徳次郎石の墓石等の石製品が数多く出回るのが、「元禄・享保」年間。この石工の加工技術の確立には、徳威郎の地において100年はかかると見る。信州「高遠石工」との関連の可能性も、併せて、最後の採石石工となった、池田武夫の考えである。

以上から「伝法寺起源説は」、建築時の伝法寺は焼失したが、最低、寺の敷石・階段には、徳次郎石が使用されたとみられる。最初の切り羽は、伝法寺西側隣接山中の「ガンコ岩」からとする意見は、複数の元石工から出てかなり有力である。しかしながら、徳次郎石の確定的な年号判定できる物件は、その後の江戸初期まで待たなければならない。

3. 徳次郎石の歴史を概括する

(A) 徳次郎石の初期時代

当所、大ぶりの民間宗教の塔（講塔・供養塔）の石製品が良く見られる。岩質は堅いものが多く青目も多い。



写真3 伝法寺門柱



写真4 西根観音境内



写真5 西根観音脇

(B) 日光街道の産業文化の発展と徳次郎石の時代

(図1 採石石工・仕上げ石工の関連地図・表6 石工が出た家 参照)

江戸時代の五街道の整備により（元和元年1615年～）、人々の往来が増し、その繁栄は「徳郎遊郭」が象徴的である。墓石等の社会的な石需要が増し、近郊への搬出が容易になってくる。街道文化が花開き、人足・運送・旅籠等が主な産業であるが、隠れた存在として石があった。徳次郎宿においては、現日光街道沿いの「仕上げ石工」、門前・田中・西根の「採石石工」の名称が残り、分業的傾向が見られている。本宿では、千住宿のような石問屋は見られない。

(C) 徳次郎石の爛熟期（徳次郎石は、蔵などの建築物の素材として多く使われる）

江戸末期～大正期にかけて、徳次郎石は、特に、蔵などの石造建築物において、貼り石・積み石・庇の細工材として使用され、爛熟期（土地の石工達による「地方セッション」とも呼ばれる 豊田久三郎）を迎える。数名で組織的に掘られ、徒弟的社会的形成が見られる。特に、外壁の貼り石・石屋根の石材として、有効性が認められ利用される。

石工と大工のコラボにより、又、徳次郎鍛冶屋の作る釘と相まって、絢爛ともいえる建造物群を近隣地域にまで創造される。これらの石造構法は、徳次郎の地から近郊に派生したとの考えもある。さらに、岩質の特徴を利用して、細工材から土木工事、生活用品（竈・砥石）にまで広く利用された。しかしながら、明治初期の「尺・角サイズ」の規格品が市場を占めるようになると、量産に対応出来ず、大谷石が席捲するようになる。

徳次郎石は手工技術で腕を上げ、付加価値を付けることで、その脈略を保つようになる。

〈参照 明日に伝えたい富屋の郷土史 「富屋の建物」〉

(D) 戦後～日光石材（株）（昭和40～昭和52年）～平成2年終焉

戦前は、女工夫がおり、戦中は、稲荷（この地方では「お宮」ともいう）・鳥居の需要が多かったと伝えられるが、概して低調であった。

戦後になると、採石は受注生産で、10数名が個人採石を営み、石造建築物の部材や細工材としての利用が

多い。これらは、すべからく代を重ねた市井の石工の感嘆すべき技術であり、戦中の物資難からも日用品（竈・砥石・五右衛門風呂）も作られた。

ほどなく、あるものは林業に、あるものは家業の農業に転じ、徐々に徳次郎山から去っていく。だが、徳次郎石の市場価値、石素材そのものの価値、特に美的人気は根強く需要はあった。

昭和40年、徳次郎石史上初めて「日光石材株式会社」により、企業化が行われた。当初の2年間、大谷の石材業者が経営し、大阪資本に引き継がれ、初めて企業化により、機械掘りとトラックにより「日光石」のブランドで出荷された。スライス板及び花瓶などの石製品が、関東近郊よりむしろ京阪神方面を中心に出荷された。最後は、3か月製品になるものが採石されず会社は清算。以来、個人により細々と採石業が営まれるも、採石石工は、平成2年 田中石工 池田武夫、仕上げ石工は、平成22年、田崎芳夫（上町）が、徳次郎石の歴史に幕を引くことになる。徳次郎石の終焉は、あくまでも、時代の趨勢にあった産出がされず、高度成長の需要に乗り切れなかった所にある。

4. 富屋地域の石造物における徳次郎石の分布

過去に、富屋地区内の、石造建物の調査は、次の2件がある。

(A) 1987年 中村幸藏《石造構法に関する研究》

徳次郎町地内 アンケート調査 193件 平均建築年 1929年（昭和4年）

※蔵などの建築物の、石の種類、相互の組み合わせを見ることができる。

表1 徳次郎町193件の石蔵の石造の組み合わせによる石の種類を集計

外 壁 構 法	件数	%	種 類	件数	%
石積	0	0%	徳次郎石石積 + 石貼	1	1%
板貼	4	2%	徳次郎石石貼	0	0%
大谷石石積	80	41%	徳次郎石貼	39	20%
大谷石石積 + 徳次郎石石積	14	7%	新潟の石石積	1	1%
大谷石積 + 徳次郎石積	0	0%	船生石石積	1	1%
大谷石貼	2	1%	徳次郎石貼 + 石貼	3	2%
大谷石石積 + 徳次郎石貼	1	1%	徳次郎石貼 + 板貼	2	1%
徳次郎石石積	37	19%	徳次郎石貼 + 漆喰	8	4%

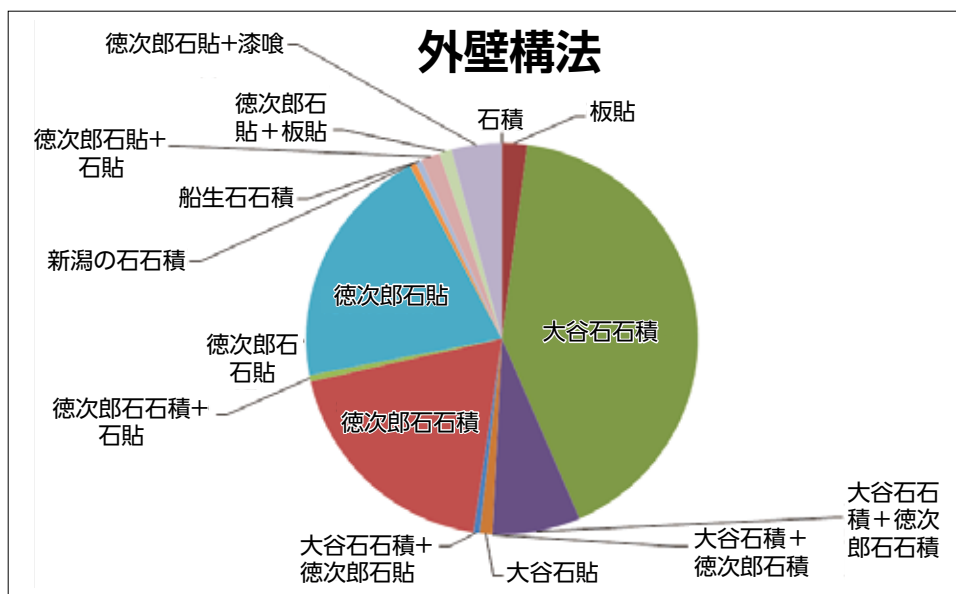


図2 中村論文の徳次郎町193件の石蔵の石造の組み合わせと、その石の種類グラフ化

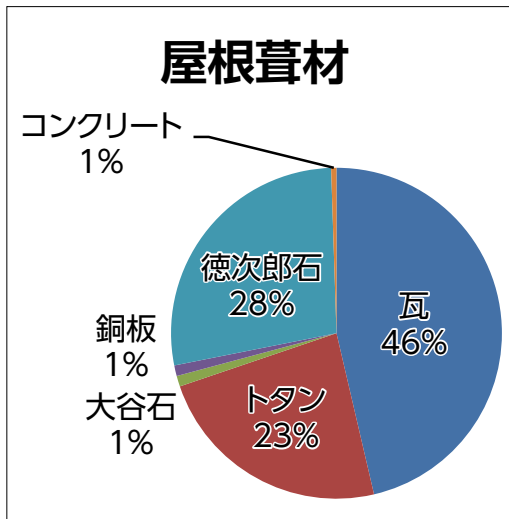


図3 表2のグラフ化

表2 中村論文による屋根葺材

瓦	89	46.4%
トタン	45	23.4%
大谷石	2	1.0%
銅板	2	1.0%
徳次郎石	53	27.6%
コンクリート	1	0.5%
計	192	100.0%

富屋地域における往時の屋根葺材は、ほぼ「徳次郎石」と考えられる。トタンは戦後の短期的な普及によるものとされる。「瓦」については、明治以降暫時徐々に「徳次郎石」より葺き替えられたものとみられる。この理由は、石屋根は重く、補充する技術のある石工の減少等により、費用を含めて維持できないからだと考えられる。

俗に「石屋根百年」と言われるが、石瓦より先に棟木が腐るから保たなくなっているのが現実に見る。しかしながら、建築当時にしても、「石屋根は身代が傾く」という言葉があるごとく、加工賃や木組みの太さなどから、決して安いものではなかった。この地域の蔵と石屋根は、各戸のステイタスシンボルとしての存在であり、併せて、地場の育成や、石工や大工の心意気が造らしたのであろう。文字通り地名「富屋」としての石造建築物の風情も、事実「石屋根百年」として、昭和の時代の終焉と共に、急速に失ってしまったのは明らかである。

NPO法人 大谷石研究会 編「大谷石百選」の中で「世界遺産への道 徳次郎と西根」に、イタリアの世界遺産の町、アルペロベッコのとんがり帽子をもった石屋根の家並みが紹介されている。

東洋の徳次郎にも石屋根の街並みが連端していたことを思うと、それと劣らぬ民族の石文化の一つであると考える。

(B) 1996年 宇都宮市立富屋公民館では、市制百周年の、地域の文化の記録の一環として、「富屋の建物」「石工のでた家」「徳次郎石工達の面談」の調査を行っている。

《富屋の建物》 江戸～大正時代の建造物につき アンケート及び聞き取り補正調査

富屋地区 66件 用途 長屋門・門・蔵・民家

全平均建築した年 1888年（明治20年）

貼石は、徳次郎石が利用される。石工によると、徳次石は粘るとして扱いやすく、時間の経過で変質しにくい特徴が、石材として利用されている理由であろう。その発祥は、火事の多かった、西根集落からだとする説がある。

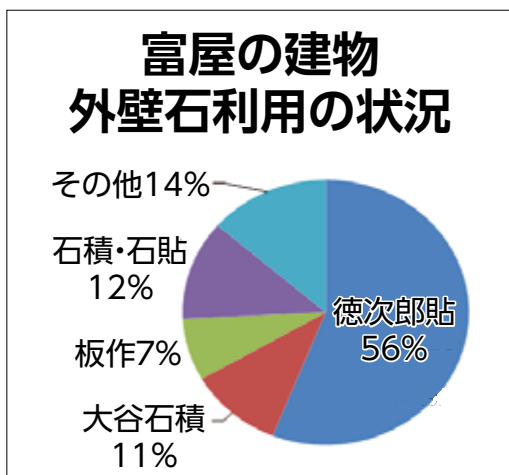


図4 表3外壁の状況をグラフ化

表3 江戸～大正に建てられた、富屋地区の建物の外壁の状況

徳次郎貼	大谷石積		
37	7		
板作	石積・石貼	その他	
5	8	9	

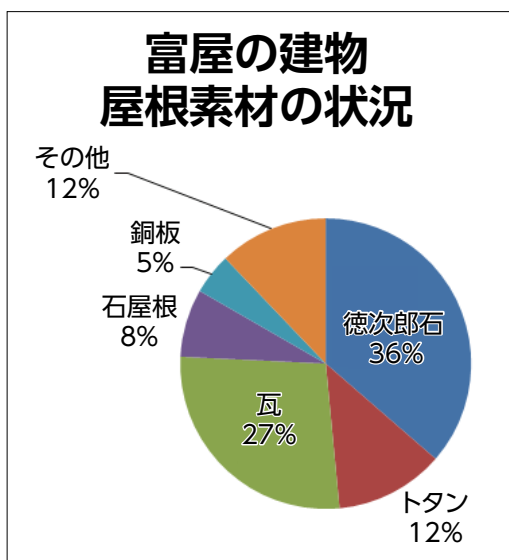


図5 屋根素材の図式化

表4 屋根素材何でできているか

徳次郎石	トタン	瓦
24	8	18
石屋根	銅板	その他
5	3	8

屋根素材としては、徳次郎石がほぼ占める。

瓦・戦後のトタンへの転用を考えれば、徳次郎石の占有率は、75パーセントと推定する。よって徳次郎石は、富屋地区のほとんどの石屋根の素材として、使用されていたことが分かる。北陸の「笏谷石」「滝ヶ原石」は「石瓦」であり、文化が似ている。伊豆石には、徳次郎とは異なる組み方の石屋根がある。徳次郎では、石造建築より、先に石屋根が成立したとの見方がある。

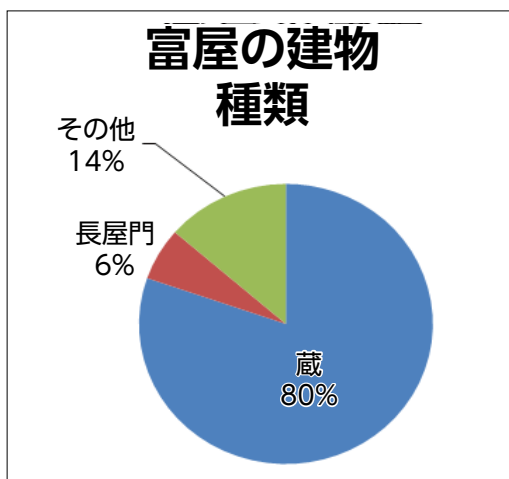


図6 時代を経た富屋の建物の種別

表5 富屋の古い建造物の種類

蔵	長屋門 四つ八門	その他
53	5	8

表5は、江戸～大正時代に建てられた、1996年時点における現存する建築物の種類である。この平均建築年は、次の通り。

蔵=1893年 長屋門・四つ八門=1832年
その他（民家等）=1895年

(C) 1996年アンケート調査 「石工の出た家」 宇都宮市立富屋公民館

表6 富屋地域で祖先が石産業に従事したか、徳次郎各戸のアンケート調査の結果である

町名	上町	中町	下町	門前	田中	西根
件数	10	5	2	10	20	5

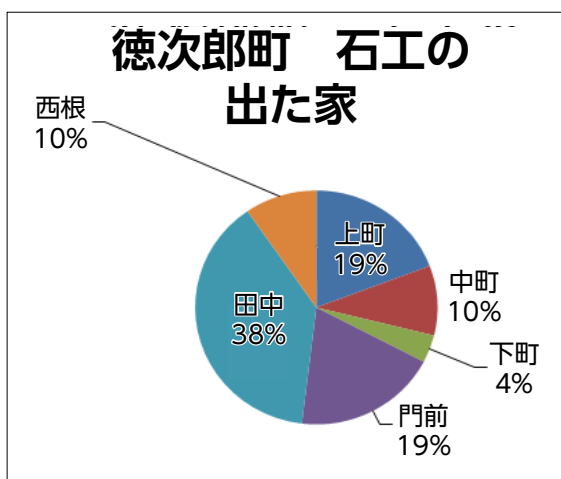


図7 町名毎の、石工の出た割合を示す

江戸時代の日光街道の、街道文化の発展とともに現在の道筋（上町・中町・下町）に「仕上げ石工」、西根街道沿いに（門前・田中・西根）に「採石石工」があった傾向がうかがえる。下町近辺は、近来、都市化傾向があり、石工の離散があったのでなかろうか。

当時の海道筋は、徳次郎宿は、日光海道中第二の72軒の旅籠をもつ大きな宿場であった。情報量が多く、多様性に富み、イノベーションが起きやすい社会が、「地域ゼッション」（富屋公民館 豊田久三郎）ともいえる、石屋根・蔵などの徳次郎石建造物を育んだのでなかろうか。

5. 徳次郎石の文化を県内（野州）・国内地域との関連を考える

(A) 県内石産地を野州石造文化圏とらえその特徴・関連性

県内の石産地は、集落毎に掘られていたと見られる。多くは、よく竈の名前が出ており、生活用品としての使用の傾向が見られる。建材としてハウスメーカーになる時代、以前、地域ごとのの建築を支え、地域の風情を形成した。これら石産地相互の関連性と特異性を見出し、採石場の現状と文化を探究し、町づくりの可能性を探る。

(B) 北陸等の石産地との関連性及び各石産地との相互の影響

全国的な石産地で、石組成が類似した石産地同士に相互の関連性が見られる。何らかの技術的伝承と交流がなされて、それぞれの風土に合う石文化を醸造した。これが、日本の凝灰岩文化の特徴と考える。徳次郎石の始まりは、伝法寺に由来し、北陸辺りより仏僧がもたらされたとする、実証的でないが逸話がある。福井市の「笏谷石」は、古来より日本海側を中心に交易され、又、江戸時代は「北前船」、これにより技術的伝播がなされてきた可能性はあるという。(福井市自然史博物館)

「伊豆石説」「房州石説」は、徳次郎石工により石造建造物について、「高遠石工」は、石仏の技術伝承の可能性を表している。日光街道の産業・文化の動脈の由来でなかろうか。それらと、徳次郎地域の伝統・石組成にあった石工の努力が、徳次郎石文化を形成したと考える。

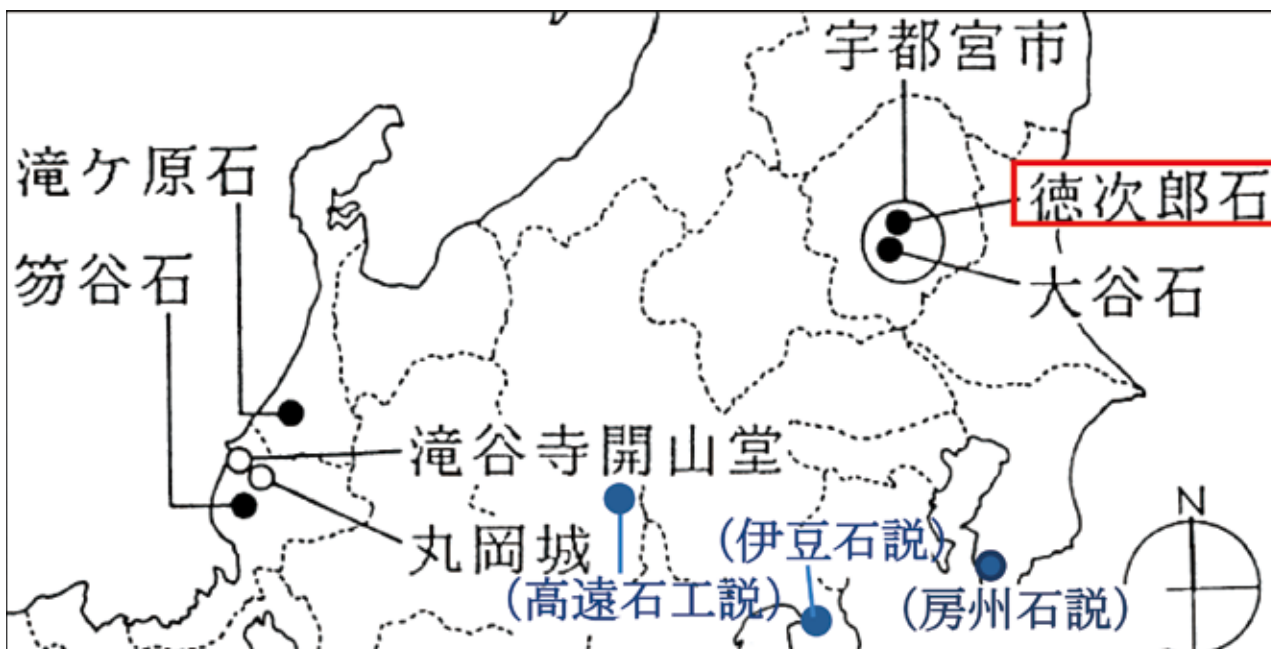


図8 「石造構法の研究」 中村幸藏 論文(1987年) P68
青色表示は、徳次郎石工により影響し相互関連したとさえる石産地を表示

6. 徳次郎石、そして街づくりへの貢献

徳次郎石の文化は、市井の民のものが形成したものである。その始まりから、各地の技術・文化を吟味しながら、石組成と地域の合うものとして文化を構成した。産業としては、日光街道の街道発展とともに、技術的にも発展した。一般的には、「農閑渡世」とらえられ、農業の合間に石産業に従事されたとされる。しかしながら、徳次郎には、3～6代を重ねた熟練した石工が多く存在して、石閑渡世的である。最盛期には、小さな専門的徒弟的集団の形成が見られる。徳次郎山は、51名の共有となっているが、石工によりテリトリーが決められ、他の領域を侵さないという、暗黙の了解ができていた。あわせて、明治より石工協同組合が組織され、平成4年6月現在で、1年間1坪6千円を納め、採石量は自由とのことであった。

用途は、建材から民間宗教・生活用品にまでおよび、徳次郎独自の石社会を形成していた。その概ね大正までの爛熟期を経てから、地域内でも徐々に大谷石に占有されていく。その理由は、大量に産出する層に恵まれず、需要に匹敵する供給出来なかったことにある。

石質の美しさは、市場価値を生み、戦後の企業化、日光石材(株)や手塚宏(昭和50年頃)が試みるも、努力もむなしく撤退せざるをえなかった。歴史的にみても、一貫してこの傾向は変わりなく、素材の特徴を生かした、屋根材・細工材で活路を見出してきた。今日、これらの石工達の蔵などの建築作品を見るにつけ、何より、

その美しさと技術の高さに驚きの限りである。この建築的寿命もそう遠からず、現存する建物の存続を、訴えざるを得ないのである。



写真6 旧篠井農協倉庫
大網石（桜石・赤石）が美しい

総じて、地域文化には「華」のあるがの特徴であるが、戦前の女工夫・昭和45年に天板の崩落による1名の犠牲者のあったことも付記したい。市内の拠点の農協倉庫の活用、とり分け大網石（赤石）の、ピンク色の「篠井倉庫」(桜石 写真)の保存と活用に期待したい。徳次郎石・大網石等現在採石されていない、廃材の、「石材バンク」等で補充するシステムがあるといい。

なお、徳次郎石工による積層による名称及び使用区分は次の通りである。建築物にとらわれしがちであるが、広範囲な用途に使用されている。さらに、大正2・3年ごろ、今市～宇都宮市戸祭間の、水道送水管敷設工事において、徳次郎石が、地元の富屋青年団において、採石から工事まで行われ等、時代の近代化に貢献している。(宇都宮市上下水道局 等調べ)

採石場は、徳次郎山の田中場を中心に、今なお草木と共にある。「平場堀り」「垣根堀り」ともいわれる遺構の調査をして、「遺跡マップ」を作製し、未来につなげていきたい。(大谷には、この採石の形態は、開発され現存してなく、貴重なものと聞く)

「野州石造文化」、特に凝灰岩の建造物の文化は、「百年文化」として、百年ごとにその時の民によって継承されていかなければならない、特性があるのでないか。その石の凝灰岩は、滅して土に還っていく。「滅して土に還る」この宗教観こそが野州人の精神性に沿い、石文化の共通性を形成しているものかも知れない。平成30年「大谷石の文化」が日本遺産に認定され、街づくりに新たな可能性への挑戦が始まっている。採石されなくなった多くの野州石造文化圏の各地の採石の文化を礎にして、大谷石の未来への創造に期待するものである。

*徳次郎石の用途別分類

門前石工 入江 仁 分類（平成7年11月2日中川取材 戦後の中心人物）による

- 1番 「米の廻り」(お宮・鳥居・地藏) 2番 「サルボ」(蔵)
- 3番 「徳次郎石」(土木工事含む多用途) 改めて、徳次郎石が出てくるのが不明。
- 4番 ばか石（砥石＝茨木の業者へ）
- 5番 「骨の廻り」又は「カリカリ石」(橋梁の建設等)

*別途、「荒石」として区分され、「五右衛門風呂」に使用されている。

参考文献（本稿は、次の文献を参考にさせていただきました。心より謝意を申し上げます）

- 「石造構法に関する研究」中村幸藏 著 昭和62年度宇都宮大学修士論文
- 「地域総合報告書 徳次郎」宇都宮中央女子高校社会科クラブ 著 昭和47年度
- 「大谷石百選」NPO大谷石研究会 平成18年度
- 「石造」一徳次郎町西根集落一 長谷智子 著 平成7年度筑波大学卒業論文
- 「目で見える富屋の歴史」宇都宮市立富屋公民館（池田貞夫 著）平成8年度
- 「明日に伝えたい富屋の郷土史」宇都宮市立富屋公民館（中川博夫 編集）及び宇都宮市制100周年記念富屋地域イベント実行委員会 平成8年度